

---

# 間桐雁夜に憑依

田ノ上

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

間桐雁夜に憑依

### 【Nコード】

N9707Z

### 【作者名】

田ノ上

### 【あらすじ】

登場人物のうち、第5次聖杯戦争開始時の死者は第4次聖杯戦争終了後最長でも5年しか生きられない。マスター側で参加。という2つのコンセプトで進めます。

## 導入

side:???

「取引がしたい、マキリ＝ゾオルケン」

「はて、耳が遠くなったかの？ 取引がしたい、などと聞こえた気がしたのじゃが。お願いがあります、お爺様。の、間違いであろう？」

始めからこれだ。相手は500年を生きる怪虫、しかも向こうの手には桜がいる。雁夜が思いを寄せていた葵の娘が。彼女は遠坂時臣に嫁いで2人の娘をもうけた。相思相愛で幸せに暮らしているが、雁夜が葵に未練を残していることは一目瞭然だ。臆視としてはここで互いの上下関係を明らかにした上で、思考誘導によって雁夜の怒りを時臣に向け、自分はいくまで手伝いを標榜し、高みの見物をするための土台を築きたいのだろう。

ste y/n i g h t本編では孫たちを気にかける様子もあつたが、方やマキリの血を受け継いだ末裔、方やいずれ自分が乗り移るために育てていた人形。2人を肉体的、精神的に締め付ける外道な行いも魔術師としては至極正しく、令呪を作った間桐の家は、なるほど支配に長けていることが伺える。

「こちらが提示するものはお前の新しい、若い肉体と、それを保つ現実的な手段だ」

「ほ？」

しかし取引をするためには互いが対等の立場でなければならぬ。興味を引くために持ち出したのは、彼が求めて止まない『不死』。

「仮に、そのようなものがあつたとしても、儂はこう言えば済む話じゃ。』こ度の聖杯戦争に勝利せよ。聖杯と引き換えに桜を渡そう。敗北すれば、桜の子、孫を育てて次回勝つまでじゃ。』とな。新しい体をくれるというならばもらってやってもよいのじゃぞ？ 優しい儂はおまえに桜の子の1人を育てさせてもよかるうて」

あつさりと言つてのける。聖杯獲得という絶対的手段があるのだから急ぐ必要はない、おまえのような若輩が何をやっても無駄だと言外に示している。その上、勝利せよとは上手い言い方だ。こちらが聖杯戦争に参加することが前提となつている。

「御三家の一角が聖杯戦争に不参加でいいのか？ もしかすると次回降の参加枠すら失うかもしれないぞ。鶴野は既に海外、今回の聖杯戦争が終わるまでは帰つてこない。そしてお前の魂があと60年も保つかない？」

ゆえにこちらは『聖杯戦争への参戦』を2つ目の条件にする。さらに原作知識だ。臓硯は魂を虫に宿し、人間を食らうことで生きながらえてきた。しかし魂の保存は不完全で、体を乗り換えるたび劣化が進んでいる。桜と第5次聖杯戦争は、臓硯にとって最後の好機だったのだ。10年後ほどではなくとも、既に焦りだしているはず。

臓硯は渋い顔を崩さないが あれ、渋い顔をしているのか？ とにかくここは強気でいなければならぬ。

「よかるう。詳しく話してみせよ」

やがて臓硯は頷いた。

## 導入（後書き）

見切り発車な感じですが、よろしくお付き合い合ってください。  
次は割とすぐ上げます。

## 主人公？ 登場

side：雁夜

「やつほー雁夜君はじめまして！ よくぞ呼んでくれました！」

「……………は？」

喋る犬がいた。いや、一瞬わからなかったが、犬の被り物をした人間のようだ。何だこれは。

「あ、私いわゆる悪魔です。契約してくれたら魂と引き換えに君の願いを1つ叶えてあげますよ！」

悪魔、といえば人を墮落させる者たちで、一神教の敵であるが、なぜここに。いや、犬の頭と言えばエジプト神話、冥界と死者の神アヌビスの姿だったか？

そういうと肯定の返事が返ってきた。説明をまとめると、元々は人だったが今はアヌビス神に仕えていて、魂と引き換えに願いをかなえたりできる。死者を導くのが仕事だが、今は休暇をもらって遊んでいるとのこと。魂を渡すと個人の所有物扱いとなり、冥界へは行けない。契約書も見せられた。

1. ストウムEEEEEEEE（以下、甲）は間桐雁夜（以下、乙）の心からの願い1つを受け、これを曲解せず可能な限り叶える
2. 乙は願いが叶った時点で甲に自身の魂を渡す
3. 契約締結後から魂の授受まで乙は契約にまつわる記憶一切を封印される

- 4．条件2の達成前に乙が死亡した場合も契約は失効しない
- 5．願いが甲の達成不可能になった場合は契約失効となり、条件1と2が無効になる

「契約するかどうかはひとまず置いて、雁夜君の願いはなんでしょうか？ 桜ちゃんの救出？ 葵さんが欲しい？ 時臣が憎い？ 臓硯を滅ぼそうか？ 聖杯戦争に勝利したい？」

「待て！ 一度に言われてもわからな「そんなはずはないよ」……」

「願いのない人なんていない。君は何がしたいのかな？ さあ、私に何をしてほしい？」

待て、よく考える。(こいつはなぜここにいる？) 俺はさつきまで臓硯に連れられて、地下室で桜ちゃんを見せられていた。(ここはどこだ？) 冷たい石の床に裸で打ち捨てられて虫に犯されている桜ちゃんを見て、俺は何を思った？ 助けたいと思った、助けなくてはならないと思った。(こいつの言っていることは本当なのか？) だがその前に考えなかったか？ (よく考える！)

「許せない……」

「誰を、許せないんだい？」

桜ちゃんにこんなことをしている臓硯が憎い。こんなことが平然と行われる間桐の家に桜ちゃんを養子に出した時臣が憎い。そうだ、あいつらが憎くて仕方ない。

だがよく考える。時臣が桜ちゃんを養子に出したのはなぜだ？ 間桐の家の魔術が途絶えようとしていたのは誰のせいだ？

「俺が、桜ちゃんが間桐に来る原因を作った俺が、臓硯や時臣に罪をなすりつけて正義面しようとしていた俺自身が許せない……………」  
「！」

「ならば君は何を望む？ 私に何をさせたい？ 魂と引き換えにしてもいい願いは何だ？」

「俺の代わりに、俺のやりたかったことをやれ！ 桜ちゃんが幸せになれるようにしろ！」

「よかろう、その望み、確かに聴き届けた！」

side end

side:ストウム

雁夜君は熱いねー、そういえば原作でも、刻印虫の浸食を受けながらぼろぼろになった体であがき続けてたっけ。すごい執念だったよね。爺と麻婆神父のおもちゃになってバッドエンドになってたけど。

ちなみに私は元転生者で、魂がエジプト神話の冥界に迷い込んだことから、黄泉行きと記憶を持つての転生との2択で転生を選んだ。今は恩返しのためにアヌビス様のところで影武者をしている。基本神に休暇はないから、役に立っているようだ。

『さて、現在地は間桐邸1階。あの後は雁夜君の体を使って、義憤に憤るふりをしつつ、ほくそ笑む爺の後について地下室から出てきたわけです。多分これから聖杯戦争に参加させるための話なんか

をして君を取り込むつもりなんじゃないかな？』

『これは、不思議な感覚だな。見えるし聞こえるのに動けない』

『さらつと無視したね。そうそう、形としては、私の操る雁夜君の体に雁夜君が憑依しているようなものかな？ 使い魔に意識を移すとこんな感じがするんですよ。今同期しているのは視覚、聴覚、嗅覚だけですな』

もしも雁夜君が自罰を願っていた場合、刻印虫で半身人外に 葵さんを誘拐 五感を同期させて虫に犯される葵さんの前で桜ちゃんを犯す 葵さんを犯しながら時臣登場直前に体の支配権を渡す 雁夜君死亡 雁夜君の心の声付きでビデオに撮っておいて金ピカ&麻婆神父に渡す 褒美として宝具ゲット！ てな感じだったりする。ビデオは10年後くらい後に凜や士朗の知るところとなったかもしれない。

『悪かった。それと、無理して敬語を使わなくていいぞ？』

上司のアヌビス様は不倫な近親相姦で生まれたお方だし（しかも母親がアグレッシブ……）、葵さんが欲しいって言われても協力したけど、雁夜君はそれを望んでいないみたいだね。

『じゃあ普通に。それと達成目標はこんな感じかな？』

- ・桜ちゃんを幸せにする（最終目標）
- ・臓硯に復讐
- ・時臣に復讐（殺すのはダメ）
- ・時臣のサーヴァントに勝つ（時臣に屈辱を与える）

『あ、あ、そねでいい』

では爺からやっつてやるとしていいじゃない？

## 主人公？ 登場（後書き）

地下室のくだりは臓硯との話の前に現状認識させるための幻術みたいなものだとということにしてください。

臓硯のファンって少なそうだよね？

side：ストウム

悪魔を自称しているだけあって、これでも契約締結には自信があるんだよ。

相手の精神状態が悪ければ、『力があれば叶いそうなこと』をちらつかせて追い込みをかける。雁夜君にはこれを使っちゃった。重要なのは、真実しか伝えないことと、精神操作をしないこと。この条件があるせいで、相手が錯乱しているとしてもやりづらい。

それを考えれば、臓硯はまだやりやすい。お互いがお互いの欲しいものを理解しているから、思わぬ条件に足元を掬われにくい。しかも魔術師である臓硯は、自分が吟味して下した判断を疑わないからね。

だからこちらは自信を持って、正直に、手札を明かせばいい。

「それではこれを読み、よければサインしてくれ」

1 間桐臓硯（旧名：マキリ＝ゾオルケン 以下：甲）は間桐桜（旧名：遠坂桜 以下：桜）の扱いに関して間桐雁夜（以下：乙）の指示を曲解することなく聞き入れ、遅滞なく従う。

2 乙は甲に新たな20代の若さの肉体と、容易に実行でき老化を防ぐことのできる現実的な方法を与え、甲はこれを自身の体とする。

3 ・乙は第4次聖杯戦争にマスターとして参戦する。

4 ・甲は乙が令呪とサーヴァントを得るために最大限乙に協力する。

5 ・甲乙は契約締結後、ただちに条件2を行う。

6 ・乙が間桐の当主となり、桜を次代当主とする。

7 ・契約締結後、甲乙いずれが死亡や改名をしても、この契約は有効である。

「雁夜よ、正気か？ ギアスペーパーにサインする以上、達成できねばならぬのじゃぞ？」

「至って正気だ。可能だからこそ書いたのだ」

シンプルイズベスト、もちろんギアスペーパーを使い、さらに特殊な加工を施しているし。これによってサインしたが最後、なんと偽名であっても契約成立しちゃうのだ！（憑依状態への対策）

この条件だと桜ちゃんが子供を作らない可能性もあるんだけど、むしろそこに注意を向けて気付けてほしい。血を残すことは魔術師の基本だからね、ってあれ……？

『考えたら桜ちゃんの子供の父親候補って、臓硯と鶴野とワカメと雁夜君だよな？』

『なっ！？ どうにかできないのか！』

『桜ちゃんが雁夜君に惚ればいいんじゃない？ 伯父と姪の愛なんて背德的……あれ？ 3等親って合法だっけ？』

『違法だ！ どうする？ このままじゃ……こうなったらアイツラヲ去勢シテオレモ……』

普段は落ち着いて考えられるのに、怒ると視野狭窄に陥るのは雁夜君の悪いところだよね！。

契約の記憶を封印された雁夜君は、私が桜ちゃんを助ける理由は知らないけれど、義憤だと思っっているらしい。私は状況次第で何人か見捨てるつもりだし、迂闊に原作知識は使えないなあ。

そうこうする間に臓硯が指摘してきたので、条件6に次の一文を書き加えた。

・桜は当主となった後、間桐の姓と魔術回路を持つ者との間に子をもつけなければならない。

「ふむ。では、サインしようかの」

間桐の家で魔術回路を持っているのは3人、私が死ねば実質臓硯だけだから、臓硯が桜ちゃんを孕ませることはほぼ決定する。とはいえ子を産んでこそこの今回の養子縁組だし、それを認めない選択肢はない。桜ちゃんの子供は臓硯の自由にできる上に、私への協力はサーヴァント召喚までだから、爺の損は少ない。きつと私のことも、桜ちゃんを助けることに囚われ過ぎて先のことまで気が回らなくなっていると思っっているのだろう。聖杯？ 雁夜君が取れるとは思っていないんじゃないかな。仮に取ったとしても、臓硯を滅ぼすより

も桜ちゃんのために使うだろうし、そうするように言いくるめられるだろうし。

昨日までの雁夜君なら、ね。

臓硯がサインした契約書に、右腕だけ支配権を渡した雁夜君が名前を書く。2つの署名が一瞬光り、契約締結がなされたことを確認する。表情は硬いまま、という演技をする。

「それじゃあ早速儀式を始めろぞ。蟲蔵でやる。準備している間に桜ちゃんのことを確認するから、よく聞けよ」

ふっふっふっふっふ、ここまで来たらあと一歩。爺もつまく騙せたことだし、マキリの怪虫が敗北するところを桜ちゃんに見せてあげよう！ おっと、もちろん雁夜君にもね。

side out

side：臓硯

雁夜に何かか憑いておるのには気づいておった。取引などと言い出した時にはどんな条件を突き付けてくるものかと思っておったが、蓋を開けてみれば拍子抜けじゃったな。若い肉体を用意するというのは簡単じゃ。乗り移るときに魂の情報を転写するために老いてしまつのを補正することが肝要。魔術を嫌って家を出た出来損ないが、どんな手札を得たのか、手並み拝見としゃれこもつかの。

「最後に確認しておくが、今の体は使えなくなる。間桐の魔術刻印は刻印虫だな？」

「うむ、その認識で良いぞ」

刻印虫1匹が魔術刻印1画に対応しておる。宿主が死ねば死体を食らって数を増やすため、死体の回収が見込めん雁夜には植えつけんつもりだかの。

「じゃあ始めるよ」

そう言うなり口調と雰囲気を変えおった。同時に足元と天井に描かれた魔法陣が光を放つ。

使われている模様は神聖文字<sup>ヒエログリフ</sup>、だろうか？ 魂に関する記述が散見される。

「いやー、上手く行って良かったよ。やっぱり『肉体が魂の示す形に変わる』っていう先入観があったせいだろうね。何度も経験してきたんだから。契約書には『20代の若さの肉体』って書いてあるだけで、五体満足とも健康な肉体とも、ましてや人間の肉体とも書かれていなかったのになー？」

「!?!」

いつの間にか桜の横に移動している『何か』が、もはや別人であることを隠しもせずと言う。

まさか!?! 振り向いてそう叫びたかったのに、口から出た言葉は違うものだった。

振り返った先、右手で桜の肩を抱いたそいつは左手に支えた姿見をこちらへ向けていて、

「qwse drftgyふじじip・@\*」

「!？」

どうやって発音したのか自分でもわからない。

side: end

side: 雁夜

あんぐりと開いた口がふさがらなかった。

いや、体は指1本動かせないんだが、そんな気分だった。

1分ほどそのまま固まっていたが、ハッと気づいて桜ちゃんに意識を向けると、見事にポカーンとしていた。瞬きするのも忘れているらしい。きっとさっきまでの俺もあんな風だったのだろう。よくわかる と、現実逃避していたところに声がかかる。

『やったね雁夜君！ 目標1つ達成しちゃったよー！』

『 なんだあれは!？』

『美形でしょー？ 臓硯の兄弟をイメージしたんだよ。爺も若いころはあんなだったんじゃないかな、すっごい意外だよね、モテたのかな？』

違う。確かに美形だが、そこじゃない。こいつのセリフから犬猫にでもするつもりかと思っていたが、だから人間だったのも意外だったが、問題は目の前にいるのが、

「『女じゃないか

!?!』」

全く同じタイミングで臓硯だった少女が叫んだ。

side: end

side: ストウム

「あ、若さを保つためには精液を定期的に体内に取り込むことが必要だけど、それさえしてればとりあえず餓死することもないし。これまで散々やってきた行為だから簡単でしょう？ 私は手伝うつもりがないけどね」

そう言って呼び出したジャツカルの頭をなでると面白いように顔を青ざめさせた。

今の臓硯は身長160程度、ごく薄青い髪をしていて胸は割と大きめで、どこことなくstay/nightの桜を思わせる。ちよつと曲っ毛っばいのがわかりやすい違いかな。実年齢？ 世の中には知らない方がいいこともあるのだよ……。

お、慌てて立ち上がるうとして転んでる。そりゃあいきなり身長が2倍になったら、うまく動けるはずもないよねえ。むしろその動きにつられて蟲が近付いている、けど、臓硯が威嚇したら離れて行

った。ひよつとしたらまだ蟲を操れるかもしれないよ？ だつたら。

「桜ちゃんを育てるために、まだ幼い桜ちゃんと、保護者である私に危害を加えるな」

ひとまずこれでいいだろうか。臓硯も おっと。

「その姿で臓硯つてのも似合わないから、これからは硯すずいつて呼ぶことにしよう。それじゃあ、桜ちゃん、上に行って可愛い服を着て、美味しいものを食べようか。桜ちゃんもご飯の準備を手伝ってね？」

硯の手足を鎖でつないで、更に2頭のジャツカルを呼び出す。賢いこの子たちは、きつと期待に応えてくれる筈。200年物の精神はそう簡単には壊れないだろうけど、意識がなくなったりしたら、部屋の隅で様子見している蟲たちもたかかってくるだろうし。

私は桜ちゃんを抱えて階段を上って行った。桜ちゃんが衰弱してるから、今夜はお粥かな？ それとも豪華に行っちゃおう？

後ろで上がったただろう硯の悲鳴は、直前に締めた扉に遮られて届かなかった。

臓硯のファンって少なそうだよね？（後書き）

やりたかったネタその1・臓硯女体化。

硯にちゃんをつけたものかどうか。

次回は説明多めな感じですかね。

## シリアスは難しいね

side：ストウム

桜ちゃんを連れて1階に戻った後、まずは空き部屋の一つを掃除して、客間に置きっぱなしになっていた桜ちゃんの荷物を整理した。

桜ちゃんはまだこちらが何か言おうとするたびに怯えているようにだけど、これはしょうがないね、恐怖の象徴だった臓硯を陥れた男が傍にいないから。自分もこの男の不興を買ったら再び地下に移されるのではないかと考えてしまうのは。ただ、自分を取り巻く環境がこの家に来た時とは逆方向に変わったらしいことは、何となくわかってはいるっぽい。たぶん、信じたいけど転落が怖いから身構えている感じなんだろうね。これはゆっくりと信頼を得ていかなくではとけないことだし、普通にやればいいことでもある。そう、普通に、優しくして、わたし好みの女性に育てて結婚する……！

『間桐雁夜の 源氏物語、ピピツときたね、これはいけるね。きつといける！ 刷り込みはできてるし、こっちは正直に良識的に接するから元一般人 監禁凌辱 救出された桜ちゃんにとっても好感を持ちやすいだろうし。 たすけてくれたおじさんは、わたしにとってもやさしくて、いろんなことをおしえてくれました の調子で結婚から出産まで行っちゃえ！ 雁夜君は勘当されていたことにすれば法的にも血縁的にも契約的にもO・K・ というかどうかとでもなるし、どうとでもする。桜ちゃんは、俺が！ 幸せにする！ 雁夜君は指をくわえてみるといいよ！』

『最後の一言がなければ怒鳴りつけていたんだがな……本気で言ってるのか？』

『ううん、冗談。この話は後でするけど、この間桐雁夜の体の余命はあと6年なんだよね、しかも最長で。最短はサーヴァント呼び出しの直後に奇襲されて脱落エンド。愛する人を失わせるわけにはいかないでしょ？ ノーマルエンドよりトゥルーエンドの方がいい！ まあやらなくても最期にフオーはいるんだけど』

『余命だと？ それは いや、あとでいい。今は桜ちゃんに集中してあげてくれ』

もつともな話なので雁夜君を無視して、（触覚同調を切ってから）桜ちゃんの頭を撫でる。一瞬びくっとしたけれど、しばらく撫でた後で手を戻そうとしたらちよっぴり残念そうに目元が動いたのは見逃さないよ。でも雁夜君がちよっと悲しそうにしたのは見逃してあげる！ 雁夜君のしたいことを代わりにするのが契約だからね。

この調子でスキンシップを重ねれば、桜ちゃんは1週間くらいで笑ってくれるかもしれない。

もちろん、ただ笑えと命令すれば笑ってくれるんだけど、それじゃあ意味がないからね。

そしてできれば今日、助け出されたその日に笑顔を取り戻してほしい。

だからまずは。

「桜ちゃんは肉と魚と骨と豆腐、どれがいい？」

「骨って食べられるんですか？」

温かいご飯を用意しよう。

side: end

side: 雁夜

台所に向かおうとしたら、家政婦さんが買い物から帰ってきた。

なんでも突然帰ってきた俺のために、臓硯が豪華なものを食わせてやれと買いに行かせたらしい。多分自分たちだけは骨付き肉や尾頭付き魚の豪勢な食事をして、余った骨を俺の餌にするつもりだったんだろう。だが家政婦さん、今回は実に間がよかった。

というか早速当主の交代を告げているストウムは、料理の前に食材の用意を忘れていたんじゃないだろうか。笑い声に張りが無いぞ。家政婦さんは驚きつつも納得して、はりきっているようだ。当主交代の席ともなれば、それに見合う料理が必要だからな。桜ちゃんとは初対面だったらしく、ちゃんと挨拶できたことを褒められて困った顔をしている桜ちゃんを、ほほえましそうに見ている。

触覚の同調を切られたせいで頭を撫でていることに実感を持つことができないが、これは仕方がないと理解できている。もしかしたら、葵さんと会うときは視覚や聴覚まで失うかもしれない。そのときは、きつと身を焦がすほどに嫉妬するだろう。今こうして考えることすら辛い。

そしてそれが、俺への罰となる。

俺は自分の苦難も幸せも、失くしてしまった。これからは、スト

ウムが新たな間桐雁夜として

葵さんと会うときはどうするんだ？ キャラ変わり過ぎて引  
かれないか？

ちよつと心配になった。

side：end

side：ストウム

あつぶなかつたー。さあ料理を始めようって時に食材がなかったら、抜けていると思われかねないからね。折角の第一印象が吹っ飛んじやう。笑いは笑いでも苦笑を貰っちゃうよ。それでもいいけどさ。

桜ちゃんは家政婦さんの邪魔にならないように、居間でソファに寝かせている。

米のとき方も知らなかったからね。本人も申し訳なさそうにしてたけど、体力も落ちてることだし気にしないように言っておいた。それに、うっかり家政婦さんに地下室のことを喋らないように、あとで良く言い聞かせるまでの時間稼ぎにもなる。

料理を待っている間に、現状把握でもしようかな。

今は聖杯戦争およそ1年前、未だ令呪はなし。刻印虫を使って魔術回路を増やさないと、バーサーカーの維持は不可能。令呪は願いがないと得られないけど、私と雁夜君の望みは聖杯ありきのものだから、なんとかなるだろう。いざとなれば、間桐の蔵書を漁って令

呪を作っちゃえばいい。

そうするとネットクは、この体の戦闘能力が最底辺なことくらいか。キャスター討伐時の対時臣戦が鬼門だなあ。炎に特化した魔術師。五行では火に対して水は好相性だけど、昆虫は鳥と同じく羽虫。火に属するから、力負けしてしまう。水気の淫虫は弱すぎる。介虫。甲羅のある生き物を使えばいいのだけど、火 土 金 水からの水剋火を目指そうにも、知識技術が足りなさすぎる。

私の手札は契約書と肉体変化の2つ。その2点において他の追隨を許す気はないけれど、時臣と戦うときは魔術戦でなければならぬ。そうでなくては彼のプライドを折ることができない。

なんとも難しいな。1年の間によく考えるしかないか。

視線を感じてふと目をやると、桜ちゃんがこちらを見ていた。

「ああ、ごめんね、桜ちゃん。ちょっと考えごとをしてただけだから」

今この家の中で桜ちゃんの味方は私しかいないんだから、頼りがないのあるように振舞わなくちゃ。

「桜ちゃんは幸せになっていいんだよ、そのためなら、私が絶対に味方してあげる。嬉しかったら笑っていいんだし、悲しかったら泣いてもいい。許せないことがあったら怒ったって構わない」

そつと抱き寄せる。

「もう、大丈夫だよ」

そう言つと、桜ちゃんは泣き出した。大声を出すわけではなく、ただ涙をこぼし続ける。ああ、やっと感動してくれた。もう大丈夫だよ。ね。泣きやんだら、きつと恥ずかしげにほころばせた顔を見せてくれるはずだから。

そのあとは、鶴野と慎二を入れた4人で食事をした。口調は雁夜君のまねをした。慎二は既に魔術のことを知っていたので、私が間桐の当主を継いだこと、次の当主は桜であることを告げた。血相を変えてわめかれたから、間桐とは関係なくなつても魔術師になりたいかどうかを聞いた。一瞬虚を突かれたようになり、しかし考えた末に頷いたので、10年後の今日までに魔術回路を発動させて見せる、という条件を出した。書庫の本は好きにしてもよいが、地下の秘密部屋に入れば命の保証はしない、とも。それでも騒ごうとしたから、これができなければ魔術師になつても落ちこぼれになるだけだと言つておとなしくさせた。

……不可能じゃないよ？ たとえば、地下の硯から何本か移植して増やすとかね。鶴野でもいいんだし。足りないものは他所から持つてくるのが魔術師なんだから。

鶴野の方は、これで魔術と縁が切れると喜んでいたので、ほつといていいよね。遺産を生前分与でもさせようかな。

食事が終わり、各々が部屋に戻る。さて、ここからは雁夜君を相手におしゃべりだ。



シリアスは難しいね(後書き)

続きます

## 聖杯戦争は1日のイベント密度が半端ないよね

side:ストウム

『桜ちゃんも笑ってくれたことだし、今日あった諸々について、色々聞いていいよ。何かから聞きたい?』

『余命のことも聞きたいが、最初から順を追って説明してくれ』

『おっけー。まずは契約書の抜け道からだね。これを見てもらん』

言いながら契約書を目の前にかざす。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

1 . 間桐臓硯 (旧名:マキリィゾオルケン 以下:甲) は間桐桜 (旧名:遠坂桜 以下:桜) の扱いに関して間桐雁夜 (以下:乙) の指示を曲解することなく聞き入れ、遅滞なく従う。

2 . 乙は甲に新たな20代の若さの肉体と、容易に実行でき老化を防ぐことのできる現実的な方法を与え、甲はこれを自身の体とする。

3 . 乙は第4次聖杯戦争にマスターとして参戦する。

4 . 甲は乙が令呪とサーヴァントを得るために最大限乙に協力する。

5・甲乙は契約締結後、ただちに条件2を行う。

6・乙が間桐の当主となり、桜を次代当主とする。（桜は当主となった後、間桐の姓と魔術回路を持つ者との間に子をもつけなければならぬ。）

7・契約締結後、甲乙いずれが死亡や改名をしても、この契約は有効である。

\*\*\*\*\*

『この中で、大事なものは何番だと思っ？』

『2・3・6番じゃないか？ 1と7は、言っちゃなんだが当然だし、4と5はなくてもいい気がするぞ』

おいしいなあ。

『そうだね。3と4はほとんど同じ内容だし、5と2もまとめてしまつていい。そうになると、6だけが仲間はずれになって目立つよね？ だからわかりやすく言葉を削つておいたんだよ。』

もちろん2も大切だけど、先入観が邪魔して抜け道を見つけれなかった、つてのは地下室で言ったよね。それに、実は臓硯にとって契約する意味があつたのは、3と6だけだつたんだよ』

『あいつは不老不死が欲しかつたんじゃないのか？ 魂の劣化のない完全な不死が』

『本当に欲しいのは聖杯なんだよ。臓硯にとって不老不死とは聖杯

の向こうにあるものだった。

だから第5次聖杯戦争で勝つために、今回を様子見するための雁夜君という駒と、桜ちゃんに子を産ませることが必要で、そしてそれだけで十分だった』

原作でも、桜ちゃんのことを始めは優秀な胎盤扱いしていたし。

黒聖杯のかけらを拾った時点で第5次がすぐに始まるのを予想していて、桜ちゃんを本命として聖杯に作り替えて、本体を心臓に移したんだろっね。

『実は6番も、魔術師の婿を取るだけで解決しちゃうんだよねー。臓硯が健在なら当然そんなの許すはずないけど、ああなっちゃったし』

『それだ、いったい何をどうやったんだ？』

『グレイテストオリオン、って言ってもわからないよね。

簡単に言っと、私は自分の体を好き勝手に変化させることができるんだよ。さつきは髪の毛の一本を伸ばして臓硯に触れることで、自分の一部として変化させた。

精神構造や記憶、知識、魔術回路はそのままに、性転換と若返りを行い、弱いながらも淫魔のような吸精能力を持たせたわけ。間桐の魔術は吸収だったから、割と簡単だったよ』

転生時の餞別としてもらった能力。使うたびにエネルギーが必要だから、乱用できないけどね。桜ちゃんの処女膜再生はともかく、硯の体と、この先の雁夜君の刻印虫の影響緩和は赤字かもしれない。

『それは なんとというか出鱈目だな』

『でもやっぱり無制限とはいかなくてね、雁夜君の寿命が最長6年だって言うのも、この辺が理由なんだよ』

『……刻印虫か』

『気づいてた？ そう、これから1年で、間桐雁夜は間桐の魔術師にならなくちゃいけない。肉体を虫に食わせ、神経を歪ませ、魔力を与えて身体機能を維持させる。』

変質そのものを起こさなかったら意味ないから、手を出しづらくてね。桜ちゃんに渡すときは、普通の刻印として受け継がせるから安心していいよ。』

『ただ、この体の苦痛は君に肩代わりしてもらうことになる。』

令呪を得るためにも、ランスロットを引き当ててもらったためにも、ただ単に魔術回路を増やすわけにはいかないんだよ、残念ながら。』

『ああ、それは覚悟の上だ。ここに来ると決めた時にな。死なず狂わず、きつと耐え抜いて見せるさ。』

『桜ちゃんを守るためには、ここで死ぬわけにはいかないんだからね』

契約書の条件4があるから、硯の調教を待つ必要はない。

条件1のおかげで、危害を加えられることもない。

早速明日から始めよう！

『次に夕食時の会話だが、どういうつもりで慎二にあんなことを言ったんだ？ 魔術師になりたいだの、間桐と縁を切るだの』

おっと、まだあったか。

『慎二は鶴野に、間桐が廃れた魔術師の家系であることを聞いていたんだよ。それで魔術師というものには選民意識を持つちゃった。自分はいずれ間桐の血統を受け継ぐことになる、選ばれた唯一の人間だー、ってね。1つしかないその枠を、桜ちゃんに盗られたと思うたから血相を変えたし、大事だったのは魔術師になることだったから、家督を継がなくても納得したんだよ』

『しかし、そんな簡単に魔術回路を作れるのなら、養子をとる必要なんてなかったんじゃないか？』

『ヒント1、そもそも間桐では作れない。』

ヒント2、足りなければ他から持ってきて補うのが魔術師。』

ヒント3、ホムンクルス技術に長けたアインツベルンでは、作成時に多くの魔術回路を刻むことができる。』

『……なんとなくわかるが、つまり？』

『他人の魔術回路は神経を綺麗に取り出して、元からあった分とうまくつないでちゃんと機能させるのはとっても大変なんだよ？ 普通は両方使い物にならなくなる上に、一代限りになっちゃうから、多くの魔術回路を備えて生まれるようにした方が簡単で確実。』

原作の綺礼も桜の刻印虫を神経から除去するために令呪を全消費していたし、士朗も完成品に手を加えるのは1から作るより難しいって言ってたし、あながち間違っていないと思うね、私は。

え？ だったら慎二にも無理じゃないかって？

これは魔術回路そのものを作れなくても不可能ではない、ということを示すための方便だからいいんだよ。

私は得手が肉体操作だから神経を基に作ればいいし、アインツベルンはそこそこ自由に作れるし、人形師の燈子さんなんかはまた別の方法で作ってるだろうしさ。

聖杯戦争は1日のイベント密度が半端ないよね(後書き)

もちろん独自設定です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9707z/>

---

間桐雁夜に憑依

2012年1月4日05時50分発行